

# 漢訳仏典に見られる口語の研究

07610444

平成7年度～平成9年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書

平成10年3月

研究代表者 長尾光之  
（福島大学行政社会学部）

## 目次

1. 疑問詞「何所」「所」について・・・・・・・・・・ 1  
（『行政社会論集』第9巻第2号、1997年1月所収）
2. 兪理明編著『仏教文献言語』・・・・・・・・・・ 11  
（『行政社会論集』第9巻第2号、1997年1月所収）
3. パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の『妙法蓮華経』目録・・・ 27  
（『行政社会論集』第10巻第3号、1998年4月掲載予定）
4. 第6回全国近代漢語研究会に参加して・・・・・・・・・・ 39  
（『東方』171号、1995年6月号所収）

## 論 説

# 疑問詞「何所」「所」について

長 尾 光 之

1

「所」は上古から現代語まできわめて普通に用いられている字である。その用法は

- 1) 「ところ」「場所」という名詞として。
- 2) 動詞の前に置かれて動作を受ける事物をあらわす。例；「耳所聞」「目所見」
- 3) まえに置かれた「為」と合い応じて受動態を作る。例；「為人所笑」
- 4) 現代語ではそのほか量詞としても用いられる。例；「一所房子」

などが主である。

ところが、中古期では上記のような用法とは異なり、「所」が疑問詞として用いられることがあった。ときには、「何」ともなつて「何所」となることもあった。「所」を疑問詞として用いる例は漢以前にもわずかながら見ることができる。斐54に次の例が引かれている。(注1)

曹劌問所以戰於莊公 (国語・魯語)

『左伝』 莊公10年ではこれを

問何以戰

と作っているから、「所」は「何」と同義だ、とするのである。斐54ではさらに、『漢書』武五子伝の

問帝崩所病

を引き、顔子古が、

疑問詞「何所」「所」について (長尾 光之)

因何病而崩。

と注釈しているから、この「所」もやはり「何」と同義としている。(注2)

ところで、太田88所収の論文「中古漢語の特殊な疑問形式」では、この疑問詞「所」をとりあげるとともに、「何所」のように「何」と連用される例についても指摘している。(注3)

「何所」の場合、「所」と同様に漢以前の言語にも用いられる。この場合は「どこ」という場所を問う例となる。

成子出舎于庫、聞公猶怒、将出、曰：「何所無君」(左伝、哀公14年)

王室多故、余懼及焉、其何所可以逃死(国語、鄭語)

人皆以為不治産業而饒給、又不知其何所人(司記、孝武本紀)

そして「上古の用例は多くないが・・・主語・定語に用いるようである」とする。

中古には「何所」は場所を問う場合と事物を問う場合がある。

場所を問う場合は

今者舍我、・・・欲何所去。欲詣何所。・・・今何所詣(仏本行集経49)

のように中古の場合の語順は動詞の前に来るものと後にくるもの2通りがあるとす。事物を問う場合は

悲声極苦、欲何所説(雑宝蔵経10)

将何所作(賢愚経10)

のように「なに」の意味で用いられ、動詞の前にくる。太田88に引用されている例以外にも次のような例がある。

若言欲何所作(法華経、信解品)

楓柳雖合抱、亦何所施(世説新語、言語)

白雪紛紛何所作(同)

賢家君在太丘遠近称之何所履行(同、政事)

卿字仲思為何所思（同、言語）

「なに」の意味で用いられる「所」としては太田88には「場所、人、事物」を問う、3種類の例が挙げられている。

場所を問う例。

王問曰：人有知恵、癡愚所在。・・・王言：人智今所在（那先比丘経、上）  
為從何來、為欲所至（増耆阿含経23）

人を問う例。

即問、是學當所從聞、當所從學（文殊師利問菩薩署経）

事物を問う例。

欲所求索（六度集経2）

以上のように「何所」「所」は「どこ、だれ、なに」などの口語的疑問詞として魏晉南北朝期に特徴的に用いられている語である。

## 2

先秦において、「なに」をあらわす代表的な疑問代名詞は「何」であった。

夫何憂何懼（論語、顔淵）

二三子何患乎無君（孟子、梁惠王）

漢代から六朝にかけては近現代語にも連なって行く単語の二音節化の傾向が顕著になってゆく。（注4）

このような傾向のなかで、漢代では「何」に「等」が加わった「何等」が現れる。

此何等民者、猶能知之（論衡、芸増）

「何等」のちには単用されて「等」のみが用いられることもあった。

用等称才学、往往見歆誉（応墟、百一詩・・・全三国詩）

六朝期の文献には疑問詞「底」が出現する。「等」と同じく「なに」の意味

疑問詞「何所」「所」について（長尾 光之）

を持っている語である。

寒衣尚未了、即喚儂底為（子夜四時歌、樂府詩集）

持底喚歡來、花笑鶯歌詠（西鳥夜飛、樂府詩集）

この「底」には後述する疑問詞「是」と連用されて「是底」となる例もある。

摘荷空摘葉、是底采蓮人（張祜『讀曲歌』）

索我將來、道我是底（敦煌變文集、斷斷書）

また「何」が「物」と連用されて「何物」となる場合もある。

北方何物可貴（世説、言語）

問老母言、祀須何物（百喻經）

ここで「等、底、物」の反切を見ると、『切韻』系韻書では

等：多肯切、多改切

底：丁兒切

物：文弗切

である。「等、底」系は語頭子音 t をもち、ソリ舌化していたと推定し、形態素 {T} を設定する。下点はソリ舌化をあらわす。さらに「物」系は語頭子音 m- を持っていたと推定し、形態素 {M} を設定する。

4

これら「等、底、物」系の疑問詞は唐以降疑問詞「是」との関連が生じてくる。「是」は唐以降、「是勿」「是物」などと結合し、のち「甚勿」「甚物」などと標記されるようになり現代語「什么」に連なってゆく。（注5）

「是」はカールグレン23による中古の再構成音が

ʒie

であり。（注6）

李方桂80による上古音が

疑問詞「何所」「所」について (長尾 光之)

表 1

	切韻音	河西音	C	K	O	Oa	TD
0127	所 $\text{ʃio}^2$	$\text{ʃy}^2$	/	shi(2) shu(3) shu'i se'i(4) se	she(8) shu she(6)	+ 1 (she(2))	she(11)
0278	是 $\text{zi}^2$	$\text{ʃi}_{2-3}$	/	shi(19) shī(2)	shi(18) shī(4) she(9)	(she) (shi(2)) + 1,(shi)	she(37) shī(2) shi

- 1 千字文 C
- 2 金剛經 K
- 3 阿彌陀經 O
- 4 大乘中宗見解 T
- 5 天地八陽神呪經 TD
- 6 法華經普門品 (觀音經) FP
- 7 南天竺国菩提達磨禪師觀門 NT
- 8 道安法師念仏讚 DA
- 9 般若波羅蜜多心經 P
- 10 法華經普門品 (觀音經) FPa
- 11 寒食篇 HS
- 12 雜抄 ZC
- 13 九九表 99
- 14 唐蕃會盟碑

K (『金剛經』) には「是」は shi, shi の 2 種の音があり、「所」は shi, shu, shu'i, se'i, se の 4 種の音がある。「是」「所」が全く同一の音として記されてい

FP	T	NT	DA	P	その他	唐蕃	Kbr
/	shu(7)	'zho	zhe	zhi	/	/	ṣū(8) śū(2) ṣūtā(2) śūvā
shi(2)	shi(16)	zhi	zhi(2)	zhi(8) zhe	shi'i(HS) zhi(FPa)	/	śi(18) /

るのは shi で、「是」は19例、「所」は2例である。

Oは『阿弥陀経』である。OaはOに糊付けされていた文書が剥離された結果現れた部分で、内容はOとほとんど同じである。O、Oaには「是」は shi, shi, she の3種の音があり、「所」にも she, shu, shi 3種があつて、同一音はO、Oaあわせて、shi「是」21例、「所」6例、sheが「是」10例、「所」10例である。

TD(『天地八陽神呪経』)では「是」には she, shi, shi の3種が、「所」には she の音があつて、同一音は she で、「是」37例、「所」11例である。

DA(『道安法師念仏讃』)の「是」には zhi の音注が、「所」には zhe の音注があり、母音部分は異なっているが、子音は同一の zh である。

P(『般若波羅蜜多心経』)の「是」には zhi, zhe の2種が、「所」には、zhi の1種の音注がなされており、zhi は「是」8例、「所」1例である。

この、DAとPでは「是」「所」の語頭子音が濁音 zh- で標記されているがこれは有声音を表したのではなく、低い調値を表したものと考えられる。

以上のように、敦煌文献に現れた「是」と「所」は同一音や、極めて近似的な音で転写されていることがわかった。

魏晋南北朝期に {T} 系の音であった疑問詞は唐五代では {S} 系の音に変



疑問詞「何所」「所」について (長尾 光之)

化した。その音変は唐代にいたってはじめておこったというのではなく、魏晉南北朝期にすでに起こりはじめ、その萌芽はどこかに残されているにちがいない。唐五代に見られる「是」と「所」の音の一致や類似はそれを示唆しているものと思われる。すなわち、疑問形態素 {T} の一部は魏晉南北朝期に {S} に変化した。疑問詞「何所」「所」の音にはそれが反映されていると見るのである。

6

ここで、これまで見た口語系疑問詞を表にして見よう。(表2)

(表2)

何 + {T}	{T}	{S} + {T}
何 + {S}	{S}	
何 + {M}	{M}	{S} + {M}

上表のように整理された疑問詞は文献中では下のような具体的な語としてあらわれる。(表3)

(表3)

何一	単用	是一
何等	等、底	是底
何所	所	
何物	没	是没

先秦にはもっとも基本となる「なに」をあらわす疑問詞は「何」であった。その後も、「何」は広く用いられたが、上表のような口語的な疑問詞が発展するにおよんで徐々に文語的な色彩を帯びるにいたった。近代中国語に連なってゆく中国語の2音節化の傾向のなかで漢代には口語的な「何等」が多用されるようになった。これは「等」として単用もされた。「底」も用いられたがこれ

はおそらく「等」との音通語であろう。口語的疑問詞の文献上での書換えの背景には{T} → {S}という大きな音変化の流れがあった。{S}が明確に文献上に現れるのは敦煌文書中である。唐時代には既に{S}は出現していた。そして本稿の主題「所」は終始{S}系であり、「所」が魏晋南北朝期に幅広く用いられたのはこの期にすでに後代につながる{S}系疑問詞が発生していたことの反映ではないだろうか。

六朝期には「なに」をあらわす「何所」「所」という疑問詞が見られるようになる。本稿ではこの「所」が漢魏六朝に用いられていた疑問詞「等」「底」が「什么」の前身である「是勿」などへ連なってゆくその橋渡しをした語であった、という仮説を提示している。

注

(注1) 斐54、下790ページ。

(注2) 斐54、同前

(注3) 太田88、91ページ。なお、この部分は当初『中国語研究』1987年10月に発表され、のち中国語訳されて「中古（魏晋南北朝期）漢語的特殊疑問形式」と題し『中国語文』1987年第6期に掲載された。

(注4) 中国語では古代語から近現代語への言語変化のなかで二音節語が増加してゆくという傾向がある。先秦の代表的な資料である『論語』と現代語の単音節語数と二音節語数を比較するとつぎのようになる。

	単音節語	二音節語
先秦（『論語』）	81.4%	18.5%
現代語（『中国語常用語辞典』）	27.7%	72.1%

この数は『論語』は楊伯俊『論語訳注』（1958、中華書局）、巻末の「論語詞典」から、現代語は『中国語常用語辞典』（1981、光生館）により算出した。

この2音節化の傾向は漢代から六朝期の言語においてとくに顕著になる。

疑問詞「何所」「所」について（長尾 光之）

六朝期の口語をよく反映していると思われる『世説新語』や『生経』『妙法蓮華経』『雑宝蔵経』などの漢訳仏典から代表的な二音節語を見ると以下のようになる。

应当、要当、必当、必当、必定、必応、定当、次当、即当、漸当、即便、便即、尋便、輒便、偶便、則便、尋即、咸即、即自、即皆、尋復、況復、還復、便復、亦復、又復、即復、遂復、重複、竟復、雖復、設復、躬自、身自、独自、心自、親自、手自、私自、各自

(注5) 中古から近代にいたる疑問詞の変遷については志村84、呂85、太田88などを参照のこと。

(注6) Karlgren 23, 262ページ。なお、高田88では *zie* としている。

(注7) 李80, 68ページに、是 \*djigx > ʒjɛ として上古から中古の音変化を示している。

(注8) 李80, 90ページ。

(注9) 高田88による。

平山87では「所」字が現代語では語頭子音 *s-* となっていることにたいし、『所』は中古韻書では語韻生母に属し、『梳』（『梳頭』平声）の上声で、北京語では *shu* と読むべきなのに *suo* と読まれている。声母、韻母ともに例外である。『所』は上古音は *srjax* である。わたしはこの字は当時動詞の前置成分として用いられることが極めて多く、輕読の影響を受けて比較的早い時期に *-rj-* と *-g* が脱落し、単純な *sax* に変わり、魚部から歌部に転入した。その結果中古では *'sa* となり、これは舒韻心母に当たる。韻書には収録されていないが、このような仮説があつてはじめてなぜ『所』が現在 *suo* と読まれるのかが理解できる。*suo* は中古 *sa* の正規の音変化なのである」（日本語訳長尾）とあるが、ここでとりあげる疑問詞「所」は後述する唐代の音写語などからみて生母であつたと考える。

文献

- 高田 88 高田時雄『敦煌資料による中国語史の研究』（日本、創文社、1988）  
Karlgrén 23 Bernhard Karlgrén『Analytic Dictionary of Chinese and Sino-

Japanese」 Paris, republished in Taipei, 1966)

- 李 80 李方桂「上古音研究」(中国、北京、商務印書館、1980)  
呂 85 呂叔湘「近代漢語指代詞」(中国、上海、学林出版社、1985)  
裴 54 裴学海「古書虚字集釈」(中国、中華書局、1954)  
平山 87 平山久雄「論「我」字例外音變的原因」(『中国語文』1987、6期)  
太田 88 太田辰夫「中国語史通考」(日本、白帝社、1988)  
志村 84 志村良治「中国中世語法史研究」(日本、三冬社、1984)

付記(1) 本稿の一部は全国近代漢語研討会(1994年10月、中国武漢市・湖北大学)で発表した。

(2) 本稿は1996年度文部省科学研究費(基盤研究C)「漢訳仏典に見られる口語の研究」による成果の一部である。

紹介

兪理明編著『仏教文献語言』  
(巴蜀書社、1993)

長尾光之

中国口語史上における訳經の重要性は太田辰夫58で早くも指摘されていた。近年、日本や中国でも訳經を口語史の資料として用いる研究者は増えてきている。しかし、訳經と中国語学を結びつけた専著は私の目に入ったところでは朱慶之92のみである。この朱92については末木文美士93の書評がある。ここでとりあげる兪氏の著書も訳經と中国語学を結びつけた数すくない専著のひとつである。1994年に武漢市の湖北大学で開かれた第六回全国近代漢語研討会の際に北京大学の蔣紹愚氏から本書を紹介された。兪氏は40代の男性で四川連合大学の教員とのことであった。

本書は大きく2つの部分に別れている。前半は「仏教文献和仏經文学語言」で、つぎの内容が収められている。

- 一. 漢訳仏典文献の概況
- 二. 仏典漢訳のいくつかの段階
- 三. 漢魏六朝の何人かの訳經僧から早期訳經の發展を見る
- 四. 訳經用語はもっとも早期の口語文である
- 五. 訳經の4言文体の形成
- 六. 訳經文学言語の特徴
- 七. 中国語史研究における訳經文学用語の価値

それでは各章ごとにみていこう。なお、引用文にある数字は著者が記している《大蔵經》の卷数とページ番号である。

### 一、漢訳仏典文献の概況

文学、言語の研究材料となるに適した訳経を概説的に説明している。

小乗仏教の文章は平易で叙事的でもあり、素朴で簡潔である。そのなかでも『長阿含経』『中阿含経』などは物語性が高い、とする。また、大乘仏典の経文は文学性に欠けるものが多い。律蔵には戒律と各種の仏教物語が収められており、これらは生活の息づかいが豊富にあらわれているとして、次の訳経をあげている。

仏教物語をもっぱら集めているのは本縁部である。孫昌武<sup>88</sup>を引き、本縁部を、

- (1) 仏伝経
- (2) 本生経
- (3) 譬喩経
- (4) 因縁経

に分けている。

### 二、仏典漢訳のいくつかの段階

中国における仏教の受入れと訳経を1. 草創期 2. 成熟期 3. 全盛期 4. 衰退期、の四期に分けている。草創期は中国文化と仏教との接触がはじまり、中国語を用いて仏教を伝えるための試行錯誤をしていた時代で、訳文は生硬であり初期段階であった、とする。全盛期は前期の成果を受け継ぎながら訳文の精密さを追い求めていった時代で、この時期の口語は訳文には反映してはいないとする。東晋後期から南北朝にいたる成熟期には翻訳は盛んになり、訳経の用語——仏教文学用語も文型が安定し、仏教は漢民族自身のものとなっていったとする。

訳経という膨大な資料を中国口語史上に位置づける際ある程度の整理が必要である。たしかに、初期の訳経は中国語としてこなれておらず、理解に困難な面がある。著者は本章と前章を通じて、東晋後期から南北朝の成熟期の訳経の

兪理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

うち物語性の高い経典を中心資料とすべきだという資料の線引きをおこなっており、それは妥当な見解であろう。唐代の訳経が口語と一致しないと指摘していることも中国口語史の観点からみても注意すべき点である。唐代以降の口語は仏教関係では主として敦煌文献や禅語録などの資料に反映されているからである。

### 三、漢魏六朝の何人かの訳経僧から早期訳経の発展を見る

安世高、支謙、康僧会、道安、鳩摩羅什などの訳者たちについて概観している。特に漢代の訳者のうちでは従来あまり重視されていなかった康孟詳を軽視できない重要人物であるとしている。

### 四、訳経用語はもともと早期の口語文である

仏教ははじめは民間側から伝わり、そののち上層部の人々や官側の注目するところとなったとし、翻訳は通俗的な口語によってなされた。仏教文学用語はもともと早期の白話文であるとする。

### 五、訳経の4言文体の形成

仏典の散文と偈文の文字数についてふれている。散文と偈文はもちろんインドにおける経典のなかの書き分けに由来している。漢訳仏典を一読すると散文部分は4字句が、偈文部分は5字句が多い。兪氏は安世高『五陰譬喻経』・支謙『般舟三昧経』・支曜『成具光明定意経』・康孟詳『修行本起経』・同『中本起経』の偈文の字数の統計により、5字句の偈文が絶対的な優勢を占めることを示し、5言詩の盛行がこれに関連するものとしている。また、康孟詳『四十二章経』を例にとり、散文の場合は45%が四字句であり、これは当時の散文の影響を受けているとしている。その根拠として、『後漢書』桓帝記・詔令の統計により、4字句が64.2%を占めていることを示している。

七、中国語史研究における訳経文学用語の価値

「仏典文献を用いて中国語の文法を研究することはある中国語文法成分の変化のあとをはっきりさせることができる」とするとともに、いくつかの例をあげて語義が仏典の用例により明らかになることを示している。

例えば、現在、李密『陳情表』に見られる「生孩六月」の「孩」は「子供」の意味とされているが、『六度集経』の

九亲惊曰，“古世之来，未闻幼孩而为斯云。”（卷一，3-4.1）/妇人以夫为帜，吾恃太子，犹孩恃亲。（卷二，3-8.3）/太子既圣且仁，润齐二仪，天下喜附，犹孩依亲。（卷二，3-10.3）/孩童绝渾其可乎？（卷四，3-22.3）/若幼孩之依慈母。（卷八，3-46.1）

などの例を見ると、この「孩」の正確な意味は「嬰孩」つまり乳児期の幼児であることがわかる、とする。

また、同じ『陳情表』「既無伯叔、終鮮兄弟」の「伯叔」にはこれまで注釈がなく、大体のところ「伯父叔父」の意味にとられてきたが、やはり『六度集経』を見ると、

二国和睦，情过伯叔。（卷三，3-14.3）/兄心存曰：“婿伯即父，叔妻即子。”（卷四，3-19.3）/昔者菩萨，伯叔二人，各资国货，俱之裸乡。（卷五，3-29.3）/大王崩，位立两国，民随所悦，仁凶分流，仁即奉兄，凶驰诣叔。（卷五，3-31.1）/昔者菩萨，伯叔齐志，俱行学道。（卷六，3-37.1）

の例では「伯」は兄を、「叔」は弟を指している。『陳情表』の「既無伯叔、終鮮兄弟」も「伯叔」の部分は「兄弟」を指していると見ることができ、仏典の用例から仏典以外の文献の意味を探りうるという方法論の有効性を主張している。

本書前半部は外枠から訳経の言語・文学研究について概括的に述べている。



兪理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

仏典という膨大な資料に対し、中国語史上に仏典をどう位置づけるかという立場から、口語性の高い資料を整理し、指摘していることは参考になる。

本書後半部では漢訳仏典を資料に用いて中古中国語の代名詞について論述している。はじめに、呂叔湘85・周法高59・何融61・太田88などをふまえたうえ、漢魏六朝の代名詞を以下のように表にまとめている。

		非 疑 問 代 詞			疑問代詞
		定 指		泛 指	无 定 指
称 人	[第一人称] 我、吾	[第二人称] 尔、汝	[旁 称] 人、他 <sub>2</sub>	[虚指] 某	[问 人] 谁、孰
	[己 称] 己、自、身				[旁 指] 他、餘、別
指 示	[近 指] 此、是	[远 指] 彼	[旁 指] 他、餘、別	或 若 干	
	[特 指] 其、之 尔 许 然、尔				[偏指] 一切、莫、各、每

つぎに以下の項目に従って論述している。

- 一. 中国語の第三人称代名詞の萌芽
- 二. 人己代名詞
- 三. 訳経によく見られる三身称谓詞
- 四. 「尔」と「然」の比較
- 五. 旁指代名詞
- 六. 一括して指し示す代名詞「一切」
- 七. 人を問う代名詞「谁」
- 八. 「何」系複音節疑問代名詞の発展と変化
- 九. 数を問う代名詞「多少」の発生

十. 訳経における「你」「这」「那」の字

それでは各項目ごとに内容を紹介しつつ気がついたことを述べて行こう。

一、中国語の第三人称代名詞の萌芽

唐以前には一、二人称に対応する三人称はなかったという定説に従いながらも、三人称の萌芽を訳経のうちにさぐっている。

1. 其

「其」と「之」はたがいに補い合う。「之」は後置され賓語に、「其」は前置され主として限定語になる。漢訳仏典では「其」はさらに一步進んで受事賓語、介詞賓語になることができる。例、

文殊师利复问，“佛说有逆，如何今说无有？”王财答言，“我不违佛所语。”“云何？”王言：“无我是佛之说，谛其以无我，是则无人，亦不作罪者，亦无受罪者。”（东汉・支谶《阿闍世王经》卷下，15-402.3）

訳経では少数ながら文末の目的語となる「其」もある。例、

⑧（商人见人获龙欲杀）即取八牛，放龙女去。时商人寻复念言，“此是恶人，恐复追逐，更还捕取。”即自随逐看其。向到池边，龙变为人。（东晋・佛陀跋陀罗《摩诃僧祇律》卷三十二，22-488.3）

2. 子

訳経では第三人称の「子」が多く用いられる。複数の時には「子曹」となる。文法的な役割は全面的である。例、  
主語となる

天帝释自念言，“是仁者戒行纯备，恐子将夺我处。当下试知审求何道。”  
（三国魏・白延《须赖经》，12-52.2）

兪理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

### 定語となる

若有菩薩闻说深般若波罗蜜时，便意念言。“是深不能大深耶？”作是念者，魔便念言：“我今已得子便。”（西晋・无罗叉《放光般若经》卷十四，8-99.3）

### 賓語となる

吾唯一事，可以胜之，偏当以此，得伏子耳。若能尔时，必得胜子，名称可畏，又增利养。（南朝宋・宝云《佛本行经》卷四，4-84.2）

訳経にこれほど多くの「子」が見られるということは、訳者たちが中国語に本当の第三人称がないために不便さを感じ、「子」を第三人称代名詞として試用したのかもしれないとし、「子」は漢魏の訳経に多く見られ、東晋以降「他」が第三人称として転化してゆくのにしたが、用いられなくなってゆくとする。「子」はもとは名詞で、それが三人称的に用いられるようになって定着したのであろうが、原典となる經典の三人称が系統的に当時の中国語の「子」と対応しているのならば、著者の意見は受け入れられるかも知れない。

## 二、人己代名詞

話題のなかで強調されている中心人物を指す「己称代詞」と強調されていない人物を指す「旁称代詞」をあわせ「人己代詞」としている。「人己代詞」は従来それほど重視されてこなかったが、著者は「漢魏は人己代詞が盛んに発展した時期である」として論述している。

### 1. 己称代詞（自、自他、自己、自己身、自身、身自、自我）

「自」は修飾語として多く用いられている。「自意、自心、自欲心、自善根……」などである。

「自」は賓語となることができ、普通は旁称代詞の「他」と対にして用いられる。

住家者常为他，出家者常为自。（南朝梁・僧伽婆罗《文殊师利问经》卷下，14-505.3）

漢代以降になると後代に影響を与える「自己、自身、自我」などの複合した己称代詞が現れる。

「自己」は漢魏に現れる。例、

无知自己患福之间，未曾休止。（《太平经》卷一百十四）

「自己」に「身」が加わり「自己身」となることがある。例、

问曰，“何谓为食？”答曰，“食者，自己身与妇于五欲中共相娱乐”（《善见律毗婆沙》卷六，24-711.3）

「自身」の意味と用法は「自己」と同じである。例、

王遣人澡浴梵志，具设肴馔，自身供养。（三国吴・康僧会《六度集经》卷五，3-30.2）

「自我」も六朝に出現したが、用例は「自己、自身」よりすくない。出現の時期も「自己、自身」はやや早く、「自我」の出現はやや遅れている。

## 2. 旁称代名詞（他、人家、他人家、別人、他別人、別人家）

旁称代名詞は己称代名詞と対になり、その対象が話し手が強調しなかったり、意識的にその意味を弱める代詞である。

漢魏六朝に指示代詞「他」は単独で旁称の意味を持ち、「人」と併用された。古くから旁称代詞であった「人」は六朝になると「家」がついて「人家」となった。「他人家」となることもある。

その他の旁称代詞には「余人」「他余人」「別人」などがある。これらは旁指代詞に「人」が加わったものである。

兪理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

### 三、訳経によく見られる三身称谓詞

著者のいう「三身称谓詞」とは「三身代詞」の一、二、三人称以外にその他の語から生まれ、尊敬や謙遜の意味を持つ語である。

一人称の謙称では「鄙、奴」を、二人称尊称では「尊、仁、賢」を取り上げている。

また、「卿」はもとは官名で、低い位の者には敬われ、高い位の者の前では卑下するという二重性をもった呼称であった。この点で「尊、仁、賢」などとは異なっている。年齢や地位が低い者が高い者を呼ぶときに使ってよい。「卿」は日常的な交際のときにしばしば用いられ、「仁・尔・汝」などと併用される。

「したしみ」をあらわす表現ではないかという説もあるが仇敵や盗賊に対しても使われるからそうとも言えない。しだいに「卿」は「尔・汝」と混用されて行き、それにつれて存在意義を失い、唐代以降になると使用範囲は大幅に縮小されて行った、とする。

### 四、「尔」と「然」の比較

周法高『称代篇』などの説を受け、「然」は文言では常用語であったが、「你」は先秦では萌芽状態だったが、漢魏以降大きく発展した。「然」と「尔」は互いに影響しあったが、混同はされていない、とする。

述語となるときには「然」と「尔」は一致する用法が多い。例、

「然」は述語となって副詞、連詞、能願動詞と結合し、不然・皆然・俱然・悉然・犹然……等として用いられる。「尔」も尔然・尔然・尔然・尔然・你然……等となる。その多くは「尔」が「然」の用法をひきついでいる。ただし「乃然」「応然」は「乃尔」「応尔」よりおかれて現れる。

「然」が状語になる例は先秦には見えるが、漢魏六朝の文献には見られない。「尔」が状語になる例は漢魏六朝には多数ある。例、

佛告王言。“不但今日闻彼之声堕地断绝，过去世时，闻其音声，亦尔断

・ 兪理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

## 五、旁指代名詞

中国語の指示代詞には近称と遠称の対立以外に、「特指」と「旁指」の対立がある。主な「特指」は「其」である。「然」「尔」も「特指」である。旁指代詞としては先秦には「他」が用いられていたが、その意義が人称の方に発展していったため、漢魏には新しい旁指代詞である「余」「別」が現れた。その他、「边」も用いられる。

「边」は形容詞でほんとうの旁指代詞ではないがその用法には旁指代詞と区別がない。

犯人妇女，或为夫主，边人所知，临时得殃，刀杖加刑。（三国吴・支谦《八师经》，14-965.2）

「余」も形容詞で「その他」「それ以外」の意味の旁指代詞として用いられる。主として定語に使われ、主語、賓語にもなることができる。例、

我欲出家，父母不听，故欲自杀，更生餘处。（三国吴・支谦《撰集百缘经》卷十，4-254.3）

「余」は「他」と用法が同じである。「余他」「他余」としても用いられる。また、「諸余」「余諸」「自余」「自他」という用法もある。

「別」は補助的な、非正統的なことを表す。例、

吾身不臭秽，流出戒德香，云何欲舍我，远游在别处？（西晋・竺法护《生经》卷一，3-74.2）

「別余」「余別」「諸別」と二音節になることもある。

## 六、一括して指し示す代名詞「一切」

とりまとめて指す場合の「一切」は『漢書』に見えるが、訳経にも広く用いられる。

### 七、人を問う代名詞「誰」

疑問代名詞は先秦においては動詞の前に置かれたが、近現代語では動詞の後ろに移動した。著者はこの変化がいつおこったのかについて「誰」をとりあげ、漢魏兩晋がこの語順変化の過渡期であるとし、漢魏の訳経では「誰」が賓語になるとき動詞や介詞の後に来ることは確定している、と明確に述べる。例、

昼夜計念，当治誰。当系誰。（三国吳・支謙《释摩男本四子经》，1—849.2）

### 八、「何」系複音節疑問代名詞の発展と変化

「何」は先秦で幅広く用いられた。漢魏六朝には「何」が他の成分と組合わさって新たな発展をし、ときには「何」が脱落して他の成分が独立して疑問代詞になることもあるとする。

はじめに「何所（所）」について太田88を引用しながら「何所」「所」が疑問詞として用いられている用例を紹介している。

つぎに、「何等（等）」「何物」が「何所（所）」とともに現代語の「什么」に連なってゆくとする。「何等（等）」「底」が「什么」の前身であるとする点については、志村良治84に音韻的な背景もふまえつつ展開されている。

つぎに「何为（为、用为、若为）」について。

「为」を含む疑問文については品詞認定についても動詞、介詞、語気助詞とするなどの各説があるが、著者は先秦の言語に由来する語気助詞と漢魏に発生した代詞の2種類があるとして以下のようにのべる。

語気詞「为」の形成には2段階がある。第1段階は

(1) 何以・・・为、何以为、何・・・为

でこれが“为”虚化のはじまりである。その実例はそれぞれ、

・何以文为（論語・顔淵）

・何以为（左伝・昭公28年）

愈理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

・而奚来为？（莊子・大宗師）——何は奚・胡などと置き換え可能  
文の転換のなかで「为」は文の遊離成分となり、以下の2組の文をつくった。

(2) 何以……为、何故……为、何須……为、何为……为

(3) 無以……为、無以为、無……为、など

魏晋では「以」は「用」と、「無」は「不」とされることもある。

疑問代詞「为」はつぎの3組に分かれる。

(1) ……为、用……为

(2) 主語+为……（状語となるか補語をともなった述語）

(3) 用为……、……用为、若为……、……若为

これに沿って見ると、漢代以後「……为」の疑問文が形成された。例、

比店人见，语言：“汝卖店上物不得活耶，乃复作贩钵人为？”（南朝宋・佛陀什《五分律》卷十二，22-83.3）

帝曰，“今故告之，反怒为？殊不可晓也。”（《汉书・赵后传》颜师古注，故以许美人产子告汝，何为反怒？）

これと相応じて「以……何为」の「何」が脱落し、「用（以）……为」となる。例、

汝死当共死，汝无我活为？宁使我身死，不能无汝存。（后秦・佛陀耶舍《长阿含经》卷十，1-63.1）

汝欲持是钵居瓦肆耶？用尔许钵为！（《摩诃僧祇律》卷三十七，22-525.2）

「何为」は定語や主語になるとき「为……」文を作る。例、

时夫人言，“王为相弃，独自得便，不念度我？”（《六度集经》卷二，3-7.2）

佛未周旋，人坐迹旁，悲思泪出。道路行者来问此人：“为持果坐此悲耶？”（失译，旧题三国吴康僧会《旧杂譬喻经》卷下，4-521.2）



魏晋以後「用为」が発生した。意味は「何为」と同じである。例、

須赖答言。“用为说此？是我所畏，终不敢欺。”（《须赖经》，12-53.1）

佛告迦叶。“用为专心而问此谊？”（竺法护《如幻三昧经》卷上，12-136.2）

「若为」は訳経には見えず、意味も「用为」とは異なり「若何」「如何」を表すが、文法的位置は「用为」と同じで、「用为」の影響の下に生まれた。例、

僧远问僧绍。“天子若来，居士若为相对？”（《南齐书·高逸传》）

この他、訳経および漢魏六朝にあらわれる疑問詞「何縁、何従（縁従）」「何謂」「何如」「何当」「奈何（那、如、若、奈）」「云何」も取り上げられている。

#### 九、数を問う代名詞「多少」の発生

「多少」ははじめは「多いか少ない」の並列であり、発展して仮定か説明されていない数量をあらわし、西晋の訳経等に数量を問う用法が現れたとしてつぎの四例をあげている。この引例が「多少」が一語の疑問代詞として確定したとすれば、その時期は『普耀経』が訳出された4世紀はじめと推定される。

所领何国土，人民为多少，所化有几人，悉为归伏不？（竺法护《普耀经》卷八，3-535.3）

取是三千大千佛土满其中尘取破碎之，一一诸尘各各碎之，各如一佛国满中诸尘，族姓子，所趣云何？岂宁有人知是尘数多少者不？（竺法护《文殊师利佛土严净经》卷下，11-899.1）

公致醉可饮几酒？食肉多少？（《晋书·陆晔传》）

彼典兵宝复白王言：“不审圣王须兵多少？”王告之曰：“吾须前后左右各各万厢。”（后秦·竺佛念《最胜问菩萨十住除垢断结经》卷八，10-1030.3）

尔时座上有菩萨名曰无量觉慧，心自念言：“最胜大士遗身舍利分布在世，兴发道心，度人多少，为有几许？”（同上卷九，10-1032.3）

兪理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

十、訳経における「你」「这」「那」の字

「你」の早期の字体「儺」は『過去現在因果経』『百喻経』にそれぞれ1例、計2例見られるが、時代決定の資料にするにはいずれも信すべき根拠がないとする。

「這」については「適」の俗字体とする説を引き、巻末の道教、仏教の文献に多くこのような例が見られるとする。

此有七人，各除一病，這除去七病。（《太平经》卷七十二）

其根，根已等断，前与后法這等，其知等于三世。（东汉・支谶《侏真陀罗所问如来三昧经》卷上，15-352.1）

「那」は疑問詞以外に「耶」の俗字体としても用いられる。さらに、「於」と同様の介詞としての用法があることを紹介している。

愿佛为我说诸佛国功德，我当奉持，当那中住，取愿作佛国亦如是。（西晋・竺法护，旧题支谶《无量清浄平等觉经》卷一，12-280.3）

以上のように本書の内容を紹介しつつ一部私見をも述べた。本書は179ページの小冊子ながら前半部で訳経の言語をめぐる外的な環境について簡潔に述べている。中国口語史の資料として訳経をとりあげようとするとき、その量的な膨大さにたじろぎそうになるが、著者は「物語性のある」資料に的をしぼり、訳経の口語に接近している。さらに、中国の仏教受容の経緯から見て、もっとも中国口語が反映されている訳経は東晋後期から南北朝期のものとしている。全体として前半部はさほど新しい知見はみられないが、訳経の口語にたいするわかりやすい概説となっている。「早期（漢魏西晋）漢訳仏典存経目録」を付しているのも親切である。

本書後半部は訳経の代名詞にまとを絞って論述している。課題を分散させず、1つに絞ることも一つの見識であろうが、訳経の言語にはこれ以外の重要課題

も数多くある。たとえば、文末に否定詞がくる疑問文、獲得や可能をあらわす“得”の変遷、被動式、“即便・便即・必定・善能”などの二音節語や二字連語、否定文における代詞の語順変化、重複形式、量詞などである。これらの課題に対する氏のご意見を是非聞かせていただきたいものである。

近年、中国や日本でも漢訳仏典に現れた口語の研究は徐々に進められつつある。中国では前出の朱92のほか、方一新・王雲路92に訳経の言語が相当程度とりあげられている。兪氏のこの著作には中国語で書かれた先行研究もとりいれられており、中国語研究、訳経言語研究のうえに位置づけられるべき重要な足跡といえる。

訳経の言語を調べる際に、念頭に置く必要があるのは原典となっているインドの言語がどの程度原型をとどめているか、どの程度中国化しているのかということである。その点でサンスクリット語やパーリ語の知識を持つことや、知識を持っている人の協力を得ることが必要となる。主として音韻の面から接近した著書には水谷真誠94がある、この書はサンスクリット語をはじめとする中国語以外の諸言語を十分に踏まえている。朱92もサンスクリット語をある程度視野にいれている。また、日本では末木文美士等84-89の訳注が連載され、一部は神塚淑子等95として出版された。これは仏教学と中国学を結び付けた研究会の討議にもとづいている。

訳経を含め、未読解の口語文献は数多く存在する。文献批判を厳密におこないつつ、各国・各分野の研究者が協力して解決してゆくべき課題もまた多い。本書は中国口語史に興味をもつ者がぜひとも目を通しておくべき書物であろう。

#### 参考文献

- |         |         |                              |
|---------|---------|------------------------------|
| 方一新・王雲路 | 1992    | 【中古漢語語詞例釈】、吉林教育出版社           |
| 何融      | 1961    | 「談六朝時期的几个代詞」『中山大學學報』4期       |
| 呂叔湘     | 1985    | 【近代漢語指稱詞】、学林出版社              |
| 末木文美士等  | 1984-88 | 【『阿含經』現代語訳】、「アーガマ」47-99、阿含宗出 |

兪理明編著『仏教文献語言』（巴蜀書社、1993）（長尾 光之）

版社

- |       |      |                                               |
|-------|------|-----------------------------------------------|
| 末木文美士 | 1993 | 書評 『仏典与中古漢語詞彙研究』、『東方』151                      |
| 神塚淑子等 | 1995 | 『現代語訳・阿含經典』、平河出版社                             |
| 水谷真誠  | 1994 | 『中国語史研究——中国語学とインド学との接点』、三省堂                   |
| 孫 昌武  | 1988 | 『仏教与中国文学』、上海人民出版社                             |
| 太田辰夫  | 1958 | 『中国語歴史文法』、江南書院、再版、朋友書店1981、蔣紹愚等漢訳、北京大学出版社1987 |
|       | 1988 | 「中古漢語の特殊な疑問形式」『中国語語史通考』、白帝社、漢訳「中国語文」1987年6期   |
| 志村良治  | 1984 | 『中国中世語法史研究』、三冬社                               |
| 周 法高  | 1959 | 『中国古代語法・称代編』、中央歴史語言研究所専刊之39                   |
| 朱 慶之  | 1992 | 『仏典与中古漢語詞彙研究』、文津出版社                           |

付記：本稿は1996年度文部省科学研究費補助金（基盤研究C）による成果の一部である。

資 料

## パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の 『妙法蓮華経』 目録

長 尾 光 之

敦煌文献の主要な所蔵図書館は以下のようである。

1. イギリス、大英図書館（スタイン文書）
2. フランス、パリ国立図書館（ペリオ文書）
3. 北京図書館
4. ロシア、レニングラード・エルミタージュ博物館アジア民族研究所（オルデンベルグ文書）
5. 大谷関係図書館（本願寺探検隊文書）

筆者は上記のうち、1997年9月にパリ国立図書館所蔵のペリオ文書原本の一部を閲覧する機会をえた。

敦煌文献は大きく見て仏教文献と非仏教文献に大別され、うち仏教文献は90%を占める。これら、仏教文献の漢文文献には後漢末から翻訳が開始された漢訳仏典の写本を多数見ることができる。漢訳仏典が中国口語史を考察する際に、重要な資料となりうることは近年定着してきた感があるが、その量が膨大であることに加えて、翻訳された時代の確定や、流伝の過程での変改等に注意を払う必要があるので時代決定の基本資料とするには慎重さが必要である。鳩摩羅什訳の諸経のうち、『妙法蓮華経』（『法華経』）は文献学的研究が比較的進んでおり、口語研究の資料としては適したものの一つである。

敦煌文献のなかにも大量の『妙法蓮華経』の筆写本がある。今回はペリオ文書に収められている同経をパリ国立図書館発行『Catalogue des Manuscrits Chinois de Touen-Houang』【I～V】（1970-1995）によりながら、『敦煌宝

パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の【妙法蓮華經】目録（長尾 光之）

蔵】（全140巻、台北・新文豊出版公司、うちペリオ文書は112～140巻）参照してその実姿影印を確認し、さらに岩波文庫版【法華經】のどの部分にそれが該当するかを注記したい。岩波文庫テキストには1976年改版の上・中・下を用いた。

【Catalogue des Manuscrits Chinois de Touen-Houang】には【法華玄賛、馬明菩薩品、妙法蓮華經講經文、妙法蓮華經疏】なども採録されているが、ここでは鳩摩羅什訳【妙法蓮華經】のみに限ることとする。またあまりに断片的に過ぎるもの、判読不能のものは省略した。ここに採録した文書のペリオ番号は以下の通りである。

- (I) 2010, 2023, 2027, 2050, 2090, 2102, 2123, 2151, 2209, 2223, 2246, 2264, 2278, 2334, 2345, 2479, 2480
- (II) 2566, 2781, 2783, 2784, 2801, 2835, 2881, 2906, 2925, 2929, 2949, 2951, 2957, 2961
- (III) 3044, 3071, 3075, 3076, 3139, 3158, 3159, 3182, 3226, 3329, 3407
- (IV) 3673, 3760, 3788, 3824, 3915, 3925, 3932, 3933
- (V) 4068, 4502, 4513, 4538, 4540, 4544, 4556, 4575, 4579, 4604, 4613, 4614, 4652, 4672, 4749, 4827, 4839, 4902, 4916, 4919, 4920, 4926, 4949, 5041, 5551, 5552, 5571, 5572, 5590

品名の略称は戸田浩暁【法華經文法論】（1965、山喜房仏書林）に従い以下のようにする。

序	序品第一
方	方便品第二
譬	譬諭品第三
信	信解品第四

パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の『妙法蓮華經』目録（長尾 光之）

草	藥草論品第五
授	授記品第六
化	化城論品第七
受	五百弟子受記品第八
人	授学無学人記第九
法	法師品第十
宝	見宝塔品第十一
提	提婆達多品第十二
持	勸持品第十三
安	安樂行品第十四
涌	從地涌出品第十五
寿	如来寿量品第十六
分	分別功德品第十七
随	随喜功德品第十八
功	法師功德品第十九
不	常不輕菩薩品第二十
神	如来神力品第二十一
属	属累品第二十二
藥	藥王菩薩本事品第二十三
妙	妙音菩薩品第二十四
普	觀世音菩薩普門品第二十五
陀	陀羅尼品第二十六
嚴	妙莊嚴王本事品第二十七
勸	普賢菩薩勸發品第二十八

パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の『妙法蓮華經』目録（長尾 光之）

ペリオ 番号	敦煌宝蔵 卷数	ページ	品名	開始句	終了句	岩波文庫 ページ、行
2010	112	67 下～ 74 上	普	無盡意菩薩。 菩提心。	阿耨羅三藐三	下252 2～ 270 3
2023	同	128 下～ 136 上	普～ 勸	世音（菩薩名者。） 。	作礼而去。	下244 6～ 336 2
2027	同	173 上～ 176 下	陀～ 嚴	世尊。是陀羅尼 神呪。	如来甚希（有）。	下276 3～ 306 12
2050	113	192 上～ 209 上	序～ 随	（有四）緊那羅 王。	終不。口（氣不 臭）	上 16 1～ 下 82 4
2090	114	59 上～ 66 下	不～	（於意云）	得法華三昧。	下140 3～ 238 13
2102	114	274～ 281	方～	（百千）万億無 数諸仏。	盡持以供養	上 66 5～ 116 6
2123	115	115～ 121	草～ 授	爾時菩薩。 告摩訶迦葉。		上264 1～ 310 14
2151	同	470 上～ 472 下	序	轉不退轉法輪。	擊大法鼓。	上 12 1～ 38 9
2209	117	225 下～ 237 上	草～ 化	爾時菩薩。	引入於仏惠	上264 1～ 中 90 12
2223	同	473 上～ 475 下	陀～ 勸	寧上我頭上。	其有受持。	下282 6～ 320 7
2246	118	18 上～ 30 上	譬～ 信	爾時舍利仏。	随宜説三	上134 1～ 262 15
2264	同	230 上～ 243 上	譬～ 信	（非世尊）也。	随宜説三	上134 11～ 262 15
2278	同	412 下～ 同 420 上	授～ 化	以用供養。	引入於仏惠	上318 5～ 中 90 12



パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の『妙法蓮華經』目録（長尾 光之）

2334	119	314 下～	受～	爾時富樓那	得見常沙仏	中 92	1～
		322 下	法	弥多羅尼子。		166	2
2345	同	438 下～	草	（各得生）長。	引入於仏恵	上270	3～
		450 下	化	如來說法。		中318	5
2479	121	37 上～	陀～	若餓鬼。	（本時品）時。	下282	7～
		39 下	嚴		八万四千人。	下314	9
2480	同	40 上～	信	我等雖説	隨宜説三	上254	14～
		40 下				上262	15
2566	122	148 上	妙	菩薩困遶	世尊。我（今欲見）	下218	6～
						226	1
2781	124	85 上～	序	一心徐乱	已為汝等説	上 32	9～
		87 下				58	11
2783	同	97 下～	方	又告舍利弗	自知当作仏	上 74	3～
		103 上				132	7
2784	同	106 下～	受～	（都不）覺知。	於空（王仏所。）	中114	9～
		107 下	人			128	10
2801	同	227 上～	序	（娑婆世）	界親近智者	上 14	6～
		228 下		梵天王主。		32	8
（この文書はスタイン7487から続いており、ペリオ2781に続く）							
2835	同	415 下	分	持戒。忍辱。精進。	經行若座臥	下 60	6
		416 上				70	8
2881	125	8 上～	序	（与眷属）六千人俱。	自知当作仏	上 10	11～
		18 上				132	7
2906	同	148 下～	序	如是我聞。一時	与若干。（百千眷属俱。）	上 8	1～
		149 上		仏住。		16	15
2925	同	279 上～	人～	爾時仏告阿難。	仏自知我心	中124	3～
		290 上	持			240	9
2929		311 上～	妙～	（劫名喜）見。	偏袒右肩。合掌（向仏。）	下228	5～
			普	妙音菩薩。		242	1

パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の「妙法蓮華經」目録 (長尾 光之)

2949	同	382 下~ 385 下	譬	爾時舍利弗。	汝等莫得。樂住 三 (界火宅。)	上134 176	1~ 1
2951	同	390 上~ 391 上	不	(若) 比丘。 比丘尼。	書写是經。爾時 (世尊。)	下128 144	2~ 4
2957	同	402 下~ 407 下	草~ 化	(若有) 所有。	成阿多羅三菩提。	上264 中 18	7~ 5
2961	同	439 下~ 442 上	普	爾時無尽意菩薩。	是故須常念	下242 266	1~ 9
3044	126	117 上	分	(聞我) 說壽命 長遠。	起隨喜心。当知 (既為。)	下 56 58	12~ 5
3071	同	214 下~ 215 上	信	(此有) 作処。	今日世尊。	上232 288	5~ 13
3075	同	221~ 222	法	幢幡。衣服。伎 樂。	所 (以者何。)	中142 154	7~ 4
3076	同	223 下~ 227 上	序	(娑婆世) 界主。 梵天王。	当 (說大乘經。)	上 14 52	6~ 3
3139	同	410 下~ 411 下	普	聞其稱觀世音菩 薩名者。	遊諸国土。度脱 衆 (生。)	下244 256	12~ 14
3158	同	464 下~ 455 上	譬	(清淨嚴) 飾。 安穩豐樂。	善哉世尊。願 (為四衆。)	上146 158	8~ 7
3159	同	465 下~ 466 下	受	無有諸女人	授記莊嚴事	中106 120	9~ 10
3182	同	510 下~ 512 下	受	身心遍歡喜	(千万) 億那由 他。	中 98 120	17~ 11
3226	127	30 下~ 32 上	信	(設服) 良藥	(我如汝) 父。 勿復憂慮。	上214 234	1~ 7
3329	同	459 上~ 461 上	妙	告妙音菩薩。	得法華三昧。	下216 238	1~ 13

パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の『妙法蓮華經』目録（長尾 光之）

3407	同	225 下～ 226 下	受	供養諸如来	一切智願。猶在不 不（失。）	中104 116	12～ 8
3673	129	598 下～ 599 下	譬	（見）諸子等安 穩得出。	如来亦復如是。	上166 174	1～ 11
3760	130	442 上～ 454 上	普	爾時無尽意菩薩。	阿耨多羅三藐三菩 提心。	下242 270	1～ 3
3788	同	599 上	序	如是我聞。一時 仏	娑伽羅竜（王。） 住王舎城。	上 8 14	1～ 9
3824	131	130 上～ 139	普	爾時無尽意菩薩。	阿耨多羅三藐三菩 住王舎城。	下242 14	1～ 9
3915	132	25 下～ 28 上	普	爾時無尽意菩薩。	衆怨悉退散	下242 266	1～ 7
3925	同	309 下～ 310 上	湧	指百歳人	願今為解説	中314 322	12～ 3
3932	同	332 上～ 345 上	普	爾時無尽意菩薩。 住王舎城。	阿耨多羅三藐三菩	下242 14	1～ 9
3933	同	354 上～	序	又觀諸仏	勤求仏道	上 24	15～
4068	133	34 下～ 36 上	化	各得相見。	一心同声。以偈頌 曰。	中 24 46	8～ 2
4502	同	153 上～ 165 上	安～ 分	但一心念	經行若坐臥	中260 下 70	7～ 8
4513	同	256 上～ 257 上	普	若復有人。臨当 被害。	福德之利。	下244 252	8～ 2
4538	同	453 上～ 453 下	安	（無有）常住亦 無起滅	咸令歡喜	中254 260	2～ 4
4540	同	459 上～ 460 上	方	以華香幡蓋	自知当作仏	上116 132	3～ 7
4544	同	465 下～ 466 下	方	（欲重宣此）義。 而説偈言。	是法皆為。	上 32 94	6～ 8

パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の『妙法蓮華經』目録 (長尾 光之)

4556	同	486 上	信	於恒沙劫	隨宜說三	上262	2~
						262	15
4575	同	515 下	序	(是時) 衆中。 無有一人。	号曰為淨身	上 46	16~
						60	5
4579	同	532 下	提	(欲重宣) 此義。 而說偈言。	四攝法。十八不 (共。)	上206	6~
						208	12
4604	同	613 上	寿	(又復) 言其。 入於涅槃。	為治狂子故	下 16	6~
		615 上				34	7
4613	134	6 下	化	(而散) 仏上。所 散之華。	(時諸梵) 天王。 頭面礼仏。	中 36	2~
						42	7
4614	同	7 上	藥				
4652	同	243 下	化	頭面礼仏足	人所怖畏処	中 78	9~
						86	3
4672	同	289 下~ 290 上	分	於無量億劫。	作是供養已。阿 逸(多。)	下 52	11~
						60	2
4749	同	418 上	陀	爾時藥王菩薩。	一四句偈。誦(誦 解義)。	下272	1~
						274	2
4827	同	494 下	普~ 陀	觀音妙智力	若書写經卷。	下264	10~
						272	5
4839	同	510 上	序	放大光明。	講說正法	上 22	10~
						26	3
4902	同	583 上	譬	安穩衆生	所應稱讚	上200	13~
						203	1
4916	同	610 上	安	觀一切法	及懈怠想	254	8~
						258	16
4919	同	612 下	受	(其) 国衆生。 常以二食。	如餘大弟(子者。)	中 98	27~
						108	3
4920	同	613 下~ 614 上	譬	守宮百足	稚小無知	上182	16~
						190	7

パリ国立図書館蔵敦煌ペリオ文書中の『妙法蓮華經』目録 (長尾 光之)

4926	同	618 上	草	(觀) 是衆生。 諸根利鈍。	甚為希有。能知 (如来。)	上268 272	10~ 4
4949	135	12 上~ 12 下	譬~ 信	無智人中	成就衆生。	上216 224	8~ 1
5041	同	427 下~ 429 上	普	觀世音菩薩。便 得離痴。	阿耨多羅三藐三菩 提心。	下248 270	2~ 2
5551	同	496 上	人	(又護) 将来。 諸仏法蔵。	世尊。当供養。	中130 132	3~ 4
5552	同	497 下	普	無尽意。是觀世 音菩薩。	(觀世) 音菩薩	下256 258	12~ 3
5571	同	515 上~ 516 下	提~ 持	(演) 説妙法。 爾時娑婆世界。	仏自知我心	中224 240	6~ 9
5572	同	518 上	序~ 方	諸求三乘人	曾供養諸仏	上 64 70	6~ 14
5590	同	624 上	化	仏告諸比丘。	与一百大 (臣。)	中 14 18	11~ 5

本稿は1997年度科学研究費・基盤研究C「漢訳仏典にみられる口語の研究」による成果の一部である。

## 第六回全国近代漢語研討会に参加して

長尾 光之

二年に一回開かれている「全国近代漢語研討会」も一九九四年で第六回を数えることとなった。今回は武漢市の湖北大学中文系の主催により一〇月二五日から二八日まで同大学招待所を会場として開催された。参加者は六六名となりここ五年では最高の人数となった。外国からの参加者は第五回までは日本からだけであったが、今回はシンガポール、韓国、日本、アメリカからの参加者もあり国際色も豊かとなった。

二五日午前から会議がはじまった。中国社会科学院語言研究所の江藍生副所長から「この研討会は他の学会と異なり、自主参加である。その良い点もあるが、

主催者にはたいへんご努力をいただいている。近代中国語は研究が次第に深められているがまだ十分とは言えない。たとえば『們』や『什么』の来源にはまだ定説がない。被動式などについても系統的に研究されてはいない。近頃、国外でも近代中国語研究を重視する人がおり、啓発されることも多いが、外国の方法論にも長所と短所がある。この四日間十分に討論をつくして欲しい」とのあいさつがあった。

研究発表のうちいくつかをつぎに見る。

\*

◇内部構擬法在近代漢語語法研究中的運用  
 蔣紹愚(北京大学)  
 現代中国語の述補構造はつぎのようになる。

	V + V	V + A
肯定	肯定	肯定
否定	否定	否定
結果補語	染成	染紅
状態補語	没染成	没染紅
可能補語	染得成	染得紅
	染不成	染不紅

この表を見ると、V + Vの状態補語の欄が空白となっており、また可能補語の肯定形と否定形が非対象である。蔣氏は従来の研究を踏まえ、その来因を

近代中国語史の資料を引用しつつ探っている。

◇宋元明市語統証 王暎（貴州大学）氏は、『文史』三五（一九九二）に、『元明市語疏証』を書いた。それで、今回は「統証」とし、いくつかは宋代にわたるため、「宋」をつけ加えた。勃蘭、李籃、蓋老、海郎、忽当、落水などの語の出典を示し語義を考察している。

◇漢語選択問、正反問的歴史発展

祝敏徹（湖北大学）



古漢語（上古から漢代）の選択疑問文は「……乎、……乎」、「……乎……也」、「……何……」など一一種、正反疑問文は「……否」、「……否乎」、「……不」、「……未」の四種があった。そしてこれら選択疑問文と正反疑問文はつきり分かれていて交差することはなかったが、近代中国語ではこの両者があるものは選択疑問文へと、あるものは正反疑問文へと混入していった、と説く。

◇「金瓶梅詞話」的切口語

白維国（中国社会科学院語言研究所）

同書にあらわれる切口語（隠語）を音通（たとえば「売涼僵」を「売良姜」と、「男風」を「南風」と書く）。字の分解（たとえば「絶好」を「色絲子女」と、「李」を「十八子」と書く）。その他、省略・会意・擬音・転倒など合計一七種類に分類して紹介している。

つぎに若手の発表を紹介しよう。

◇唐五代時期的処置式

劉子瑜（北京大学助手）

王梵志詩、敦煌變文、「祖堂集」を資料として用いている。処置式に用いられる「將」「把」「捉」はそれぞれ一五五例、四五例、一〇例である。処置式の来源については王力、祝敏徹、P・A・ベネット、梅祖麟諸氏の意見は分かれているとしたうえ、連動式に用いられている動詞が虚詞化したことを主流とし、上古の「以」字構造がそれに合流して成立したとする。

◇嘗試態助詞「看」的歴史考察

吳福祥（中国社会科学院大学院生）

「試みる」という用法の「看」は六朝に発生し、唐宋に発展し、明清に成熟する。「V-V看」は宋代に、「VV看」は明代にはじめて見える。変文の「V(O)看」は後代の文献にはほとんど見られないうが西南と江淮官話の一部には残されている。

前記以外の主な報告は以下の通りである。

◇中古詞彙研究与口語詞溯源

方一新 (杭州大学)

◇疑問代詞「何所」「所」

長尾光之 (日本、福島大学)

◇近代漢語完成動詞及其相關問題

鐘兆華 (社会科学院語言研究所)

◇『游仙窟』与唐代口語語法

趙金銘 (北京語言学院)

◇説「揩大」

江藍生 (社会科学院語言研究所)

◇「……那? 作摩?」雑談

—近代漢語語法發展中一種特殊模式—

曹広順 (同前)

◇釈「太古、過從、摘厭」

李崇興 (華中理工大学)

◇『金瓶梅』人称代詞的得点

張惠英 (社会科学院語言研究所)

◇論『金瓶梅』的判断句

許仰民 (信陽師範学院)

◇『金瓶梅詞話』難解詞語彙釈

盧甲文 (河南省社会科学院)

二六日夜には外国の近代中国語研究の状況を聞きたいとのことで、シンガポール、韓国、日本、アメリカの順で話が

つた。前日に突然依頼されたため、依頼された発表者はとまどってはいたが、会場は参加者も多く盛況であった。

シンガポールからはシンガポール南洋大学中文系の王永炳講師がシンガポールで使用されている中国語の特徴について話した。

韓国からは国立全南大学中文系の安奇燮助教授が韓国では中国語・中国文学の研究が盛んになってきていること、なかなかよく整備された『中国語研究目録』が刊行されていることを紹介した。なお、本研究会には中国留学中の韓国からの大学院生二名も参加した。このところ韓国からの留学生は急増しており、大学によってはその数が日本に次いで第二位になっているところもあるという。

日本からは長尾が日本中国語学会などの全国的な学会があること、そのほかさまざまなレベルで無数の学会や研究会が開かれていること、大学図書館や中国関係書専門の図書館、専門書店のいくつか

中国発行の日本語月刊総合誌

**人民中国**  
**People's China**

6月号 人民中国雑誌社 定価350円(税込)  
[年間御予約約4,200円(税込)]

●特集・二一世紀を前に・児童教育の現状を考える◆黄河の古い河床に育った「民権ぶどう」◆杜仲茶・老衰防止の保健飲料◆世界自然遺産・武陵源を行く◆中国ざつくばらん・「労働法」が目ざすもの◆連載・渤海経済圏を行く◎天津飛び込みの徐益明監督◆中国からのエアメール・幻のジャンクを追って◆中国の民家・六盤山麓の回族の村◆庶民のくらし・全員集合・ファミリーバンド◆スポットライト・公衆トイレで設計コンペ・国際都市へ面目一新／一二億人目の赤ちゃん誕生・計画出産の普及で九年遅れが

「人民中国」「中国画報」「北京週報」は中国で編集・発行される日本語雑誌です。政治・社会・経済・考古・歴史・美術など幅広い分野の最新情報を掲載。

お申込は 03・3837・0300 東方書店



などを紹介した。また、近年全国の大学図書館所蔵図書の相互貸借システムができあがっていることも紹介した。

アメリカからはカリフォルニア大学サンタバーバラ校の遇笑容助教授がアメリカのアジア研究学会、中国語教師学会について、各大学ではしばしばワーク・シヨップが開かれ、執筆途中の論文などを紹介して意見を聞くことができること、電子メールが広く使われていることが紹介された。

中国の学会は参加者全員が同じ宿舎に泊まって行動をとるものが普通である。その間さまざまな情報もたらされる。今回は北京大学の蔣紹愚氏から四川連合大学の俞理明氏が執筆した『仏教文献語言』（九三年、巴蜀書社）が紹介された。近年仏典に現れた口語の研究が盛んになっているが、俞氏は漢訳仏典の文献と言語を概述したうえでくに代名詞について集中的に論述している。また、江藍生女士と白維国氏によって翻訳が完了し、出版の事情によって遅れていた故志

村良治教授の『中国中世語法史研究』も最後のハードルを越えれば中華書局から出版のはこびになると言う。楊耐思氏からは「近十年來近代漢語語音研究」と題して近代音研究の概況が報告された。最後に王暎、蔣紹愚両氏から九三年の近代中国語研究の概況について、白維国氏からは中国社会科学学院語言研究所近代漢語研究室の活動状況について報告があった。

研究会のあいまをぬって黄鶴樓、東湖、楚城などを見学した。なお、外国人は中国人の四倍ほどの会議参加費が請求された。これは事前に通知されていなかった。この受付のとき若干混乱があった。「ぜひ事前に徹底しておいて欲しい」というのが参加した外国人の共通した声であった。また、今回は参加者が多かったため、いくつかの研究発表は資料なしで聞かねばならなかった。この種の会議は資料がないとほとんど理解不可能なのでこの点も改善を望みたい。第七回大会は一九九六年に湖南省長沙市で開かれる。

(福島大学)

# 北京週報

航空便で届く週刊ニュース誌  
定価120円(税込)  
北京週報社

「定価二〇〇円(税込)、年間御予約六〇〇〇円(税込)」

四月の主なニュース◆14号「タブー」

から抜け出た中国の性教育／原産地の中国で繁殖するヘラジカ◆15号／中国のカ

トリック教の過去と現状／中華人民共和国租税徴収・管理法◆16号／貧しい大

生の学業を援助／全国老人太極拳大会に

日本代表団が出演◆17号／黄河の歴史は

百六十年／中国、最低賃金制を実施が

## 中国画報

4月号 発売中

中国画報社 定価450円(税込)

CHINA PICTORIAL  
中国画報 4/1988



表紙・黄梅戲の若手女優韓再芬▼野に咲く戯曲の花、黄梅戲▼失われた砂漠の王国——ニヤ遺跡▼石林とイ族の人々▼歴史に輝く古都——咸陽▼古都北京の町並千仏崖▼中国スポーツ界のスターたちが

「定価四五〇円(税込)、年間御予約五四〇〇円(税込)」